

# 10年ビジョン

10-Year Vision

取締役

高橋 稔

Minoru Takahashi



2002年10月に作成した当社の10年ビジョンの中で、成長2倍、効率2倍を目標に掲げている。これはトヨタ自動車株式会社殿のG15&固定費削減の達成と同じような目標で、成長の為には多くの製品開発をしなければならないし、効率の為には開発工数を減らさなければならない。矛盾のように見えるが、協業という戦略以外にも、これを両立させる唯一の技術解がある。先行開発から変更レベルの開発まで、全ての技術が知的財産という企業の共有財産に繋がって実行される状態を作ることである。

Good Design, Intellectual Capital Management, etc世の中は既に企業財産をいかに巾広く活用するかを当然のこととしてやっている。知的財産の活用が高まれば、新たな開発が減り、効率が高まり、先行開発へのパワーが増強されて、新たな知的財産を産み、という循環が生まれて成長が高まって行く。

単なる標準化と思う技術屋もいるかも知れない。しかし、標準化されたものは成長して行かない。ただ陳腐化して行くだけである。知的財産とは、利用する技術屋によってそれ自体が成長して行けるものを言う。しかし、技術屋の能力の差によって、価値が大きく変わるものは、生かされる形の知的財産になっていなくて、不完全なものと言わざるを得ない。例えば、言語表現中心でまとめられたもの、図面と評価だけのものは、生かされる形の知的財産になっていないことが多い。

つまり、変化の激しい時代、知的財産がどれだけ流動性に富んでいるか、生かされる部分が如何に大きいか重要なポイントである。

従って、原理原則で考え方が明確に表現されていることが基本であり、今の時代、自動化技術、シミュレーション技術等と結合した

形で、価値が積み上げ易く、変化し易い構造になっていることが前提となって来ている。このような知的財産は、活用の経験とともに、構造やデータの多様化が生まれ、価値が増加して行くと同時に、バーチャル環境での、精度、条件という価値の増加も伴って、ますます効率化を進展させている。

また、この知的財産化はとどまることなく進化しようとしており、ソフトの世界では、仕様と対象ソフトを形式的に一致させることから、仕様から対象ソフトが自動的に生成されて、常に物理的に1対1に一致させる方向に動き出している。具体的には、UML、モデル言語による仕様（目的）から自動的にソフト（機能）を生成することが技術競争となって来ている。

しかし、生産性とは、最後は個人の能力の向上と活性化であり、産官学間の協調、協業等により、多様な知識と触れ合うことが、いつも変わらない人間の成長と効率向上の基本であり、組織だけでなく、個人の成長2倍、効率2倍が本当に望むところでもある。